

防災・減災を念頭においた 学校教育活動における学び

防災教育推進協会は、東日本大震災の翌々年の2013年に発足し、今年で設立11年目を迎えます。協会の主な事業は、防災検定およびその年少版であるジュニア防災検定の実施です。それ以外に、小中高大学での出前授業や、企業研修等への講師派遣、防災イベントの企画、防災関連書籍の発行なども行なっています。

ジュニア防災検定は、子どもたちの生きる力、いわば「人間力」を培うための防災教育プログラムとして開発されました。初級から上級までの3つの級に分かれていて、これまでに全国で約8万人が受検しました。神奈川県では、一部の私立中学、座間市の公立学校、大和市の少年消防クラブなどで導入されて

います。

検定と聞いて、筆記テストを思い浮かべるかもしれませんが、ジュニア防災検定の課題は、家族で防災について話し合った内容をまとめる家族防災会議レポート、筆記試験、防災自由研究の3つです。特に自由研究は、防災がテーマであれば、内容や形式は問いません。防災マップや、新聞、ポスター、作文、工作など、各自が思いおもしろい方法で取り組みます。

ある小学6年生は、段ボールで精巧な公衆電話を制作して、学校周辺の公衆電話の設置場所をまとめた地図と一緒に提出してくれました。

毎年、成績上位者と特に内容が優れたレポートおよび自由研究を発表・表彰します。近年は

コロナ禍で中止していますが、全国から子どもと保護者を集めて表彰式も開催しています。

ジュニア防災検定のねらいは、子どもたちに防災意識の定着を図り、自助の力を養うことです。ですから、楽しく取り組んで防災に関心を持つきっかけにしてほしいと考えています。

さて、学校現場における防災教育では、子どもたちが受け身の姿勢で「やらされている」というケースが少なくありません。興味のない話を一方的に聞かされたり、形だけの避難訓練を実施したりするのは、自ら考えて行動する力は培われません。いかに工夫をして、子どもたちが主体的に防災に取り組む下地を用意してあげられるかが、教育者の腕の見せどころでしょう。

防災の第一歩は まず知ることから

私は、防災教育の出前授業で子どもたちに話す際、必ず「知災」と「備災」という2つのキーワードを紹介しています。

知災は、災害の歴史を知る、

あるいは自分の住む地域を知るという意味です。備災は、災害を避けようのない現実として捉えて、しっかりと備える力、いわば心構えのことです。災害について正しく知り、しっかりと備えることが、防災力を高める近道なのです。

例えば、防災授業で「世界の



濱口和久 (はまぐち・かずひさ) さん

一般財団法人防災教育推進協会 常務理事・事務局長。拓殖大学大学院地方政治行政研究科特任教授・防災教育センター長。稲むら火の館(濱口梧陵記念館・津波防災教育センター)客員研究員。

過去の教訓に学ぶことで 未来の備えにつなげる、 その姿勢が大切です

は残っていませんが、江戸時代の慶長地震、平安時代の貞観津波でも、同様に大きな被害が出たことが推測できます。一方で、たとえ記憶は薄れても、記録は残り続けて、後世の私たちに大きな教訓を授けてくれます。

東日本大震災では大きな揺れの後に巨大な津波が到達しましたが、明治三陸地震では、ほとんど揺れなかったにも関わらず、大津波で約2万1000人が犠牲になりました。歴史的な記録を学ぶことで、「地震の揺れが小さくても、大津波が起き得る」ことを正しく知り、備えることができるのです。何より危険なのは、「忘災」です。記録を顧みず忘れ去ること、過去の災害の教訓が無駄になってしまいます。

検定で保護者の 防災意識も向上

すると、子どもたちは必ず、「今日、学校でこういうことを教えてもらった」と、その内容を保護者に伝えるでしょう。話を聞いた保護者の中には「子どもが言うのなら……」と、子ども部屋の家具の転倒防止策を講じる人もいます。

は必ずです。つまり、子どもに向けて防災教育をすることで、その親の防災意識にまで良い影響を与えられるのです。繰り返しますが、防災教育の基本は、自助の意識を醸成することです。自助がなければ共助や公助も成り立たないと思います。学校における防災教育は、自助の力を育む重要な取り組みなので、どうか協力をお願いします。また、そのためのツールとしてジュニア防災検定を活用いただければ幸いです。

震源分布」を紹介する際、過去に起きた地震の震源地を赤い点で記した世界地図で、日本全域が真っ赤であることに、多くの子どもたちが衝撃を受けます。そして、「日本で暮らすには、地震のリスクは避けられない」として、いかに説明すると、子どもたちはきちんと理解した上で、では助かるために何をすればいいのかと真剣に考え始めます。知災において重要なのが、記憶と記録です。今年は大東大震

災から100年の節目の年ですが、震災を体験した人の多くは既に亡くなっていて、震災の記憶は失われつつあります。災害の記憶は、時の経過とともに徐々に薄れて、やがて消えてしまいます。

また、東日本大震災のときに発生した平成三陸大津波では、1万人近くの人が亡くなりましたが、この地域では、昭和三陸地震でも、明治三陸地震でも津波が起きています。詳しい記録

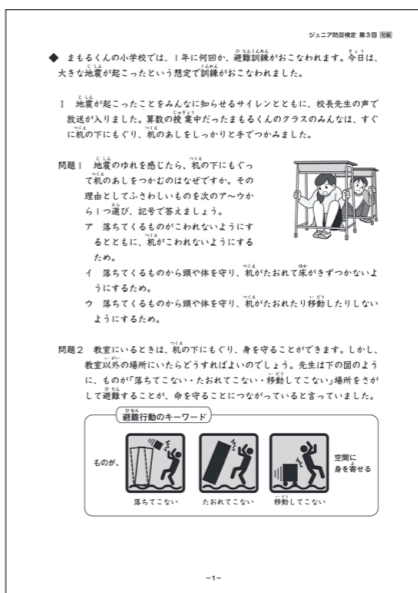
波が到達しましたが、明治三陸地震では、ほとんど揺れなかったにも関わらず、大津波で約2万1000人が犠牲になりました。歴史的な記録を学ぶことで、「地震の揺れが小さくても、大津波が起き得る」ことを正しく知り、備えることができるのです。何より危険なのは、「忘災」です。記録を顧みず忘れ去ること、過去の災害の教訓が無駄になってしまいます。

すると、子どもたちは必ず、「今日、学校でこういうことを教えてもらった」と、その内容を保護者に伝えるでしょう。話を聞いた保護者の中には「子どもが言うのなら……」と、子ども部屋の家具の転倒防止策を講じる人もいます。

参加者より質問

Q 子どもたちの防災への関心を高めるためのアドバイスはありますか

A 子ども意識を、「自ら進んで行動しなければ」と転換するような仕掛けが必要です。自分たちで調べものをして考えたり、どこかに足を運んだり、実際に行動を伴う学習を行うことで、より積極的に防災に取り組めるのではないのでしょうか。



ジュニア防災検定の問題用紙。検定試験に取り組むことで、子どもたちの防災力を培うことにつながる。